

# 書と詩Ⅲ―書（画・舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・こころ―

芭蕉の死後、弟子たちは分裂し、蕉風は、都市俳諧（其角の江戸座）と田舎俳諧（支考らの美濃派など）に分かれ、発展はするが、しだいに遊戯的で低俗な俳諧が横行し墮落していった。しかし、芭蕉没後70年ほどして、各地で「芭蕉に帰れ」という俳風革新運動が起こった。この時期の俳諧を「中興俳諧」また「天明俳諧」ともいう。この革新運動の拠点には、蕪村や炭太祇らが住んでいた京都であった。蕪村は俳諧中興の中心となり、第二の俳聖と呼ばれている。

与謝蕪村（1716～1783）江戸時代中期の画家、俳人、俳画の大成者、池大雅と並んで日本南画の大成者。

本姓は谷口または谷氏。丹後に滞在した後、与謝と名のつた。名は信章。

通称は寅。俳号は蕪村、宰鳥、夜半亭（二世）。画号は春星、謝寅など。

今の大阪市都島区毛馬町で生まれた。十代の頃父母を亡くし江戸へ出た。

江戸で20歳頃、夜半亭早野巴人の内弟子となり俳諧を学ぶ。

巴人は芭蕉の高弟の其角と嵐雪から俳諧を学んだが、彼は高潔な人で、

墮落した俳風にはなじまず、中興俳諧の礎となった俳人であった。

蕪村が27歳の頃、巴人が没すると、蕪村は江戸を去り各地を放浪。

36歳の頃、京都に住み、丹後に遊学、50歳過ぎて京都に定住した。

天明3年（1783）12月24日、68歳で他界。洛北一乗寺村の金福寺に墓がある。



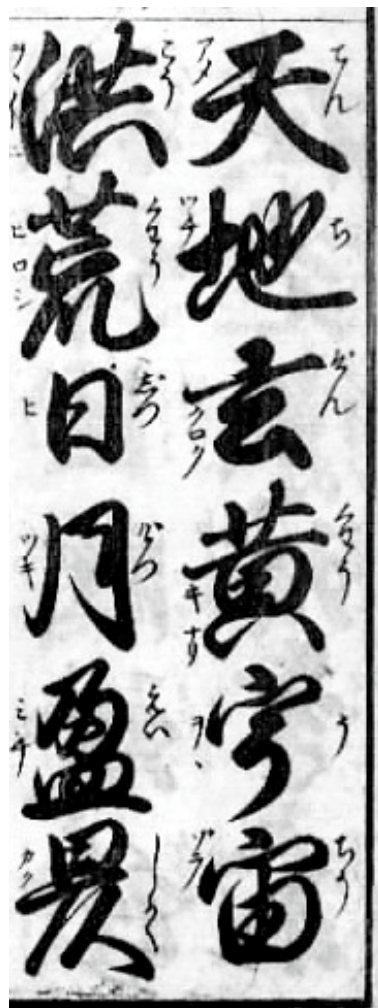
蕪村像 呉春筆

岡田彰子氏は、蕪村の書風の変化を以下の五期に分類している。1、寛保～宝暦期（27～48歳）2、明和期（49～56歳）3、安永前期（57～61歳）4、安永後期（62～65歳）5、天明期（66～68歳）

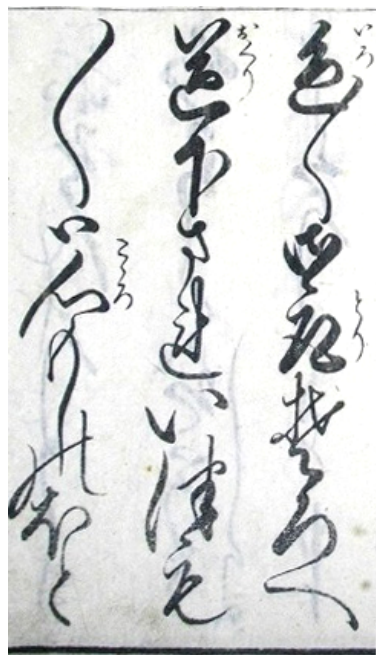
安永期から天明期にかけて、蕪村独自の書体は形成され、円熟し、完成された。蕪村の書は、御家流とも平安古筆とも唐様主流とも異なる独自のものである。蕪村は書家としても一家を成している。

若いころは、江戸時代の公用書体であった御家流（和様書道）を習ったと思われるが、中年ころには平林静斎の書に心酔していたようである。平林静斎は唐様の大家の細井広沢の高弟であるが、後にその唐様主流から離れていった書家である。唐様は王羲之や元の趙孟頫や明の文徵明を規範とし、細井広沢らによって確立された。

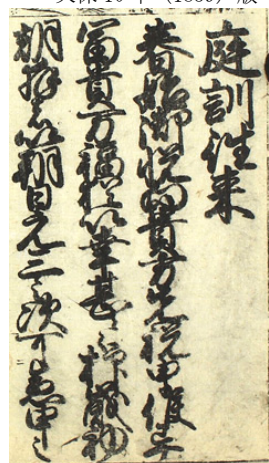
## 御家流



『御家千字文』部分 文化11年（1814）  
江戸書林 御家流臨泉堂書

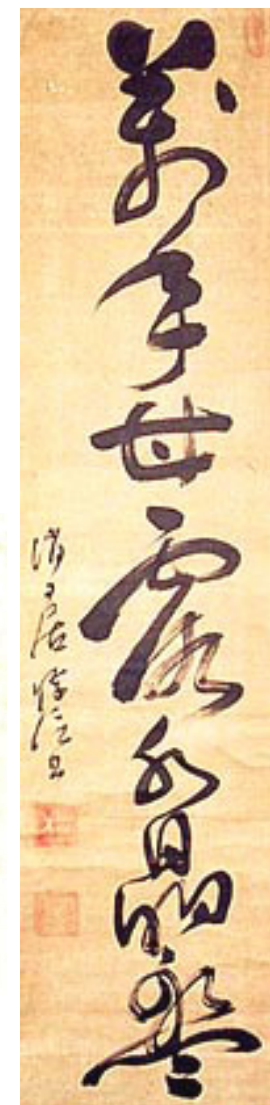


『女用文小倉錦』部分  
天保10年（1839）版

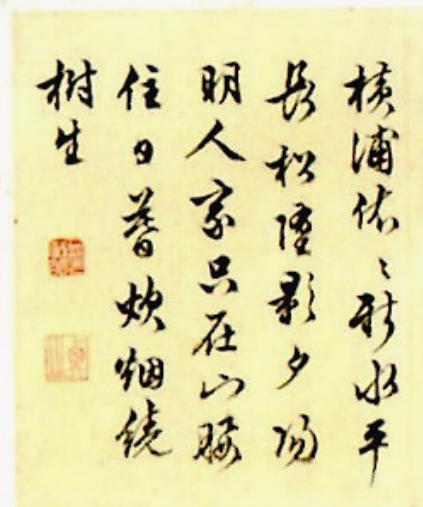


『永楽庭訓往来』部分 天明6（1786）  
手紙文の手本を集めた教科書の元祖。

唐様（広沢門の主流派は王羲之・文徵明を規範としたが、惲信は独立・祝允明・董其昌の影響を受け新道を行った。）



平林惲信（静斎）筆  
草書軸1行物 105×28 cm  
「萬年甘露水晶盤」  
祝允明の狂草の影響がある。



伝・蕪村臨「文徵明写八勝図」部分  
縦28.2 cm 紙本淡彩 卷子装1巻 個人蔵

文徵明の書と画をそっくりに模写している。蕪村30歳前後の作らしい。  
蕪村は中国の名品の模写をくりかえすなどして書画を学習したという。

蕪村は書も絵も独学である。師と仰ぐに足る高潔な人物がいなかったからだといわれている。

寛保2年（1742）蕪村27歳の年、恩師早野巴人が死に、蕪村は、以後10年ほど関東から東北地方を放浪、一時江戸に戻ったようだが、1751年（宝暦元）36歳の時、京都に上がり京都のあちこちに住んだようだ。蕪村の号を初めて使ったのは、延享元年（1744）29歳の頃の時らしい。号「蕪村」の由来は、陶淵明の「歸去來の辞」の「田園將蕪 胡不歸」からとられたといわれる。蕪村とは「荒れた村」ということか。

1754年（宝暦4）、京都を離れ、丹後の宮津の見性寺に三年余とどまり絵の修業に専念した。

1757年（宝暦7）秋、与謝村出身といわれる妻「とも」と一緒に、与謝を去り、ふたたび京都に帰ったと思われる。「とも」は絵画を能くし、号を「琴」という。二人には娘「くの」が生まれた。彼の書画には次第に独自のものが表れてくる。丹後では名句もいくつか作られた。

菜の花や月は東に日は西に 五月雨や大河を前に家二軒

夏河を越すうれしさよ手に草履 春の海終日のたりのりかな



与謝峠から加悦谷を望む  
この美しい風土の中で、蕪村の芸術は準備され、飛躍的に展開していく。

陶淵明は「歸去來兮辞」を作った後「歸園田居」五首を作った。

蕪村は、陶淵明のこれらの詩に励まされて、自分が歩いて行こうと、ぼんやり考えていた、本当の芸術の道に、確信をもったに違いない。

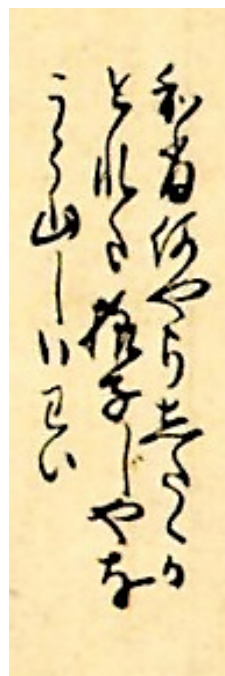
少無適俗韻 性本愛丘山 誤落塵網中 一去三十年

羈鳥恋旧林 池魚思故淵 開荒南野際 守拙歸園田

（歸園田居）其（一より）

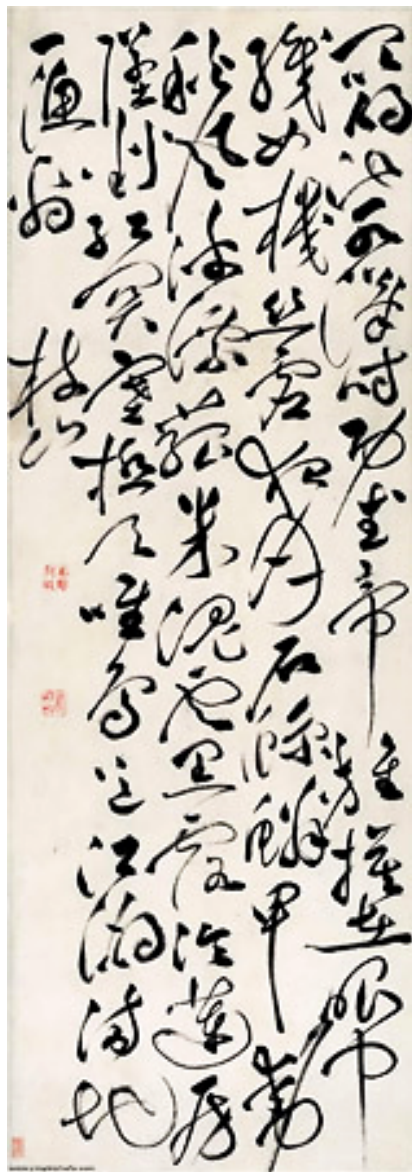


蕪村筆「三俳僧図」1755年頃 25.2×53.7 cm 軸 紙本 個人蔵  
俳諧仲間の三人の僧を描いている。漫画の先駆。  
下の図版は「三俳僧図」の台詞らしき部分。その書風は流麗な連綿体で、特に個性的なものではない。

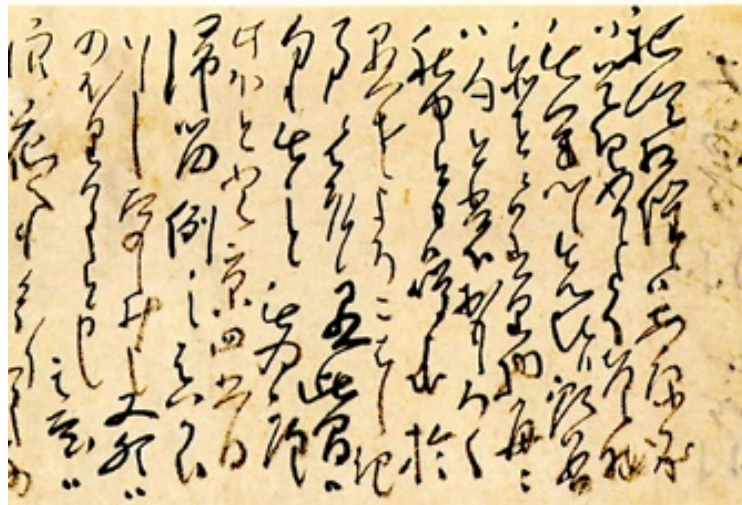


和尚何やら  
したたか  
とれた様子  
じゃな  
うら山しい  
わい





しゅうくいんめいひつ と ほ しゅうこうしじく  
祝允明筆「杜甫秋興詩軸」106.5×37 cm  
祝允明 (1460~1526) 明の文人。蘇州の人。



「蕪村筆大魯宛書簡」部分 安永3年(1774)9月2日付 15.8×47.8 cm  
柿衛文庫蔵 軸装 大魯から摺物等を贈られたことへの礼状。

大魯様 蕪村  
秋冷相催候 御安康被成 御暮めでたく奉存候 拙無恙候 先比は預御書  
忝ことに御すり物毎々 御句どもおもしろく 社中ども御噂申出候 於  
愚老よろこばしき事に御座候 愚此間ハ 句も無之候 無為庵 此ほど登京  
四五日 滞留 例之はいかい いたしたのしみ申候又冬ハ のぼり可申と申  
候 其節ハ 浪花へも参り可申との・・・

安永3年の大魯宛の手紙あたりから、蕪村の書は、大きく変化する。  
隣の行の中に文字が入り込み、行間は狭くなり、かつ歪み、文字の大小が極端な書が増えてくる。これらの変化には、明の祝允明の狂草体や日本の版本の書風の影響が考えられる。  
蕪村が心酔した平林惇信は唐様の書家であつたが、彼の書は、次第に祝允明や独立といった革新書家の影響を受けたため、王羲之や趙孟頫、文徵明を規範とする唐様主流派や、和様の伝統を重んじる御家流の書家たちから俗書とさげすまれた。そのような俗論とは反対に、蕪村は、その惇信の造形感覚に新しさを感じ、それを自己の書に取り入れた。これは、書における、芭蕉の「かるみ」「高悟帰俗」の理念の実践だと思われる。



蕪村筆「十宜図」の「宜風」 明和8年(1771)56歳 17.9×17.9 cm  
紙本淡彩 国宝 川端康成記念会蔵

明末清初の文人、李笠翁の詩(伊園十便十宜詩)を書いたもの。楷書できちんと書いている。

1760年(宝暦10)蕪村45歳頃、与謝氏を名のる。  
1766年(明和3)~68年(明和5)の間に2度、讃岐に滞在し「蘇鉄図」などを描く。  
1766年(明和3)51歳、太祇召波らと俳諧の結社「三葉社」を結成。  
1770年(明和7)蕪村55歳、夜半亭二世を継ぎ宗匠となる。  
1771年(明和8)池大雅との合作「十便十宜図」のうち「十宜図」を制作。



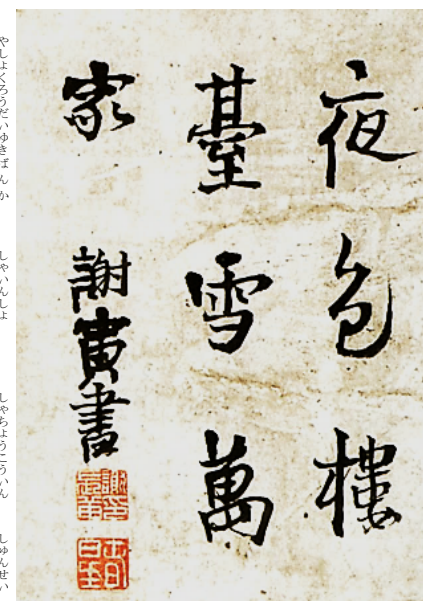




南画は、中国の文人画である南宗画が日本に伝わったもので、日本では南画と呼ばれている。日本の南画は、池大雅と与謝蕪村により大成された。



蕪村筆「夜色楼台図」66歳頃の作 紙本墨画淡彩 28×129.5 cm 国宝 個人蔵



「夜色楼台雪万家」 謝寅書 印（謝長庚印）（春星）

京都の町並み、夜の雪景色、家々から漏れる暖かい灯火、しんと降り降る雪と静寂、書体には中峰明本の「柳葉体」の影響がある。

左上の「岩石図」の画賛と落款

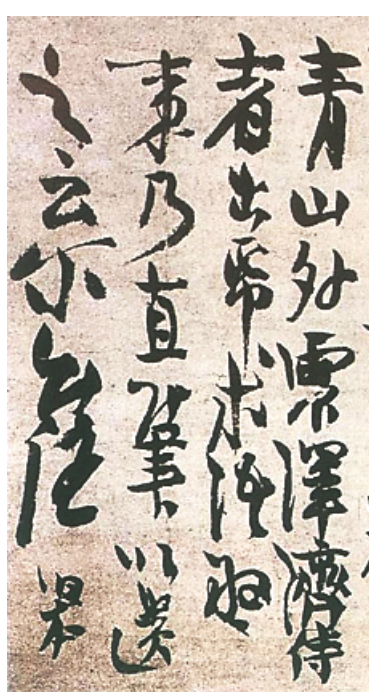
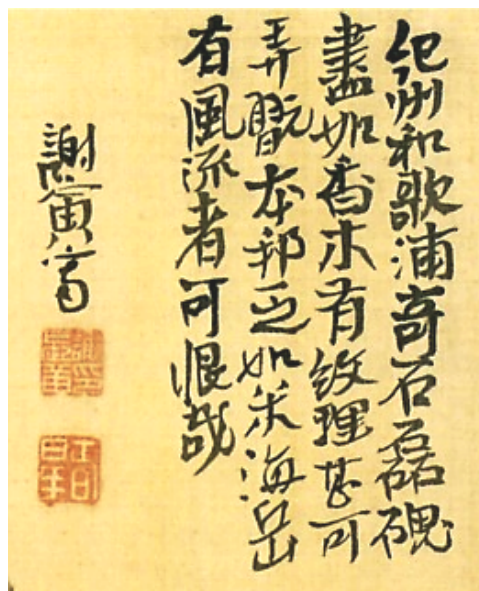
「紀州和歌浦奇石磊砢 盡如香木有紋理甚可弄翫本邦之如米海岳 有風流者可恨哉」

謝寅寫 印（謝長庚印）（春星）

中峰明本の「柳葉体」の影響が大きい書風。



蕪村筆「岩石図」部分 風呂先屏風 23.3×72.1 cm 60代半ば以降の作 逸翁美術館蔵



中峰明本墨蹟「九侍者宛警策」部分 紙本 31.5×67.2 cm

中峰明本（1263～1323）は中国元代の禅僧。

その独特の書体から「笹葉中峰」と呼ばれた。鎌倉時代末の禅僧大燈国師（宗峰妙超）が彼の書の影響を受けている。

蕪村は、60歳頃から中峰明本の墨蹟の影響を受けたようである。その書体は「柳葉体」と呼ばれる。

中国の南宗画は、明末以降、

董其昌の南北二宗論により流行

した。南宗画の芸術理念は、「脱俗

遠塵」。画業は職業ではなく

士大夫（高級官僚）の余技であつ

た。日本へは江戸時代の中ごろ清

から長崎に來た沈南蘋や伊孚九

により本格的に伝えられ、大発展

していった。日本の南宗画は南画

と呼ばれ、職業画家の仕事であ

り、画家の身分も様々である。

蕪村は絵画も書も独学である。

『芥子園画伝』や沈南蘋らの絵か

ら技法を体得した。

蕪村の芸術理念の「離俗論」は

清の李笠翁の画論『芥子園画伝

初集』の「去俗論」から出た説で

ある。蕪村は「去俗」を俳・書・

画のすべての芸術の理念とした。

俗を用いて俗を離れる。

俗の病源は市氣にあり。

（脱俗の句）

柳散り清水かれ石とくころど

蕪村は常に中国に憧れ北宗画

や南宗画を研究し、和画の技法も

加えて、南画を創造した。

「夜色楼台図」は対比による表現

である。黒と白、暖と寒、他者と

自己など。また柔らかな質感表現

も蕪村の特徴である。

宿かさぬ火影や雪の家つづき





蕪村筆「山水図屏風」右隻 天明2年（1782）紙本銀地 六曲一双 166.9×363.7 cm MIHO・MUSEUM 蔵



蕪村筆「新緑杜鵑図」絹本着色 28×129.5 文化



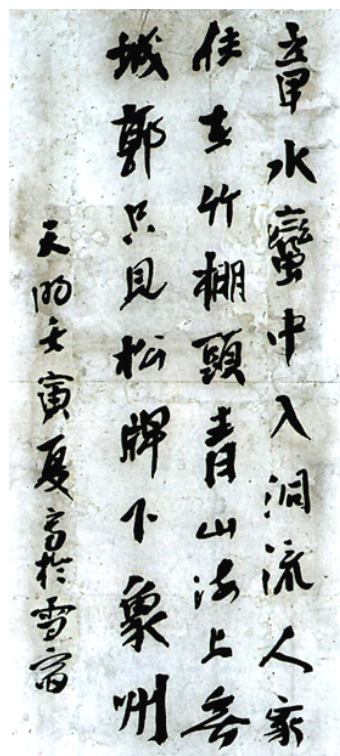
蕪村筆「春光晴雨図」63歳以降作 絹本淡彩 個人蔵

明の唐寅にあやかっつてつけたらしい「謝寅」という号は安永7年（1778）7月（63歳）から天明3年（1783）（68歳）、他界するまでの5年間用いられた。「謝寅時代の南画」は蕪村が最晩年に到達した蕪村独自の様式の絵画である。

「春光晴雨図」は、前景では雨が降っているが、遠くでは晴れている、といった天候の微妙な変化を主題にしている。森と山の間に人家が見える。人間と自然の調和もまた主題のようである。統に描かれた繊細な滲みが、蕪村独特のやわらかく暖かい春の景色を生みだしている。

詩書画同源 画は無声の詩 詩は有声の画 書も無声の詩

初夏。竹林の下に小川が流れ、新緑の樹林の向こうに山がみえる。樹林と山の間を一羽のホトトギスが左に飛んでいく。右端に一本の道が見える。樹林と山の間にガスがたちこめ、幻想的な仙境を感じさせる。65歳ころの作品か。「俗を離れて俗を用いる」絵らしい。



（画賛）右隻は、元代の于済編の『唐宋聯珠詩格』から張籍の詩「蛮州」の詩意を描いたという。所どころ「柳葉体」で書かれている。

章水蠻中入洞流、人家住在竹棚頭。青山海上無城郭、只見松牌下象州。

（落款）天明壬寅夏寫於雪齋 謝寅 印（謝長庚）（謝春星）

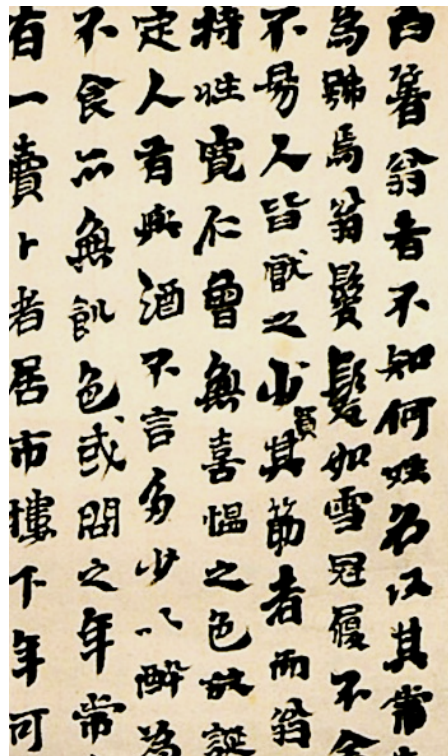
南方の辺境の地にある理想の村（桃源郷）を描いたと思われる。

南画山水図の最高傑作。蕪村の心のなかの理想の風景を描いている。銀地屏風の上に墨と淡彩で描かれている。山の中腹に住む高士を訪ねて、右から左につづく道を、高士と従者が歩いている。川には荷物を運ぶ舟か漁師の舟が浮かんでいる。独特のマチエールの作品。

質感の追求は蕪村の生涯のテーマだったらしい。金と金メッキのよ

うな微細な差異を見分けられる、非凡な感性や眼力を目指した。





「白簪翁画賛」部分 独特の楷書体



しらほしおう  
蕪村筆「白簪翁画賛」天明元年（1781）  
紙本淡彩 逸翁美術館蔵



かんざんじつとくす  
蕪村筆「寒山拾得図」天明元年（1781）紙本着色  
二幅対 各 134.7×58.1 cm 個人蔵



右幅は卷子を持った寒山。左幅は箒を持った拾得。上部には寒山詩と拾得詩が書かれている。



とびからすず  
蕪村筆「鳶鴉図」65 歳頃 紙本墨画淡彩 二幅対  
各 133.5×54.4 cm 京都・北村美術館蔵



目をむいて嵐に立ち向かう鳶。寒さに耐える鴉。蕪村の思想の表現か。対幅の対照的な表現。静と動。

（南画が重視した美意識）  
「氣韻生動」とは、氣品があり、生き生きとして迫真的なこと。絵画の生命とは心に内在する氣韻である。「氣韻」とは氣品のこと。  
「写意」とは、外形を写さず、対象や画家の精神・内容を表現すること。  
「逸品」の「逸」とは規範から外れた、枠組みにとらわれないなどの意味。書画の常識的基準から外れているため、優劣が決められないものを逸品として分類したもの。「逸格」ともいう。三品（神品・妙品・能品）外のもの。  
「去俗」とは市氣（人の歡心を得ようとおもねる気持ち、商売気、俗人にこびて自分を売る精神など）がないこと。

蕪村の作品（俳書画）は静かで内的、柔らかく、暖かい。  
「鳶・鴉図」の鳶は、向井去来の句「鳶の羽も 刷ぬ初時雨」を、鴉は、芭蕉の句「日ころ憎き鳥も雪の旦哉」をもとに描いたとされている。  
「かいつくろいぬ」は、羽づくろいのこと。トビの羽根は、時雨に濡れて、羽づくろいしたように光っている、という意。  
蕪村の表現は、様々な技法の研究と弛まぬ創意工夫によって実現されている。鳶図は刷毛と筆にたつぷりと墨をふくませて一気に描き、偶然の滲みを生かして激しい風雨を表現している。鴉図では薄墨で円や弧を描き、そこにできた、不定形の塗り残しの紙の地の白を生かして、雪を表現している。  
彼は素材の紙や絹の艶や質を生かして、筆をこすりつけたら、紙や金や銀のひかり具合や地の色を生かして描いたり、畳の目をつけたりするなど、常に新しい表現に挑戦し続けた。



## 俳諧と俳画と書

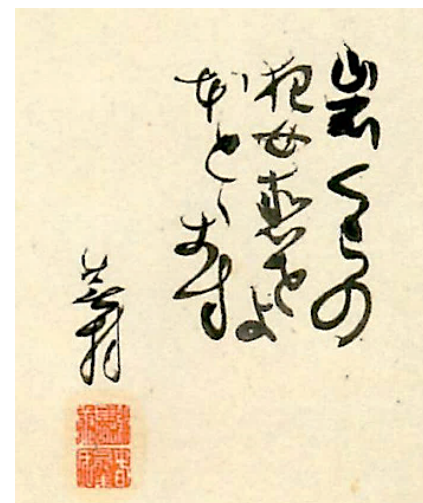
俳画は、江戸時代の初めごろ野々口立圃<sup>ののぐちりゅうほ</sup>によってはじめられたが、真の俳画を開花完成させたのは蕨村である。蕨村の俳画は、南面の修練の基礎の上に生みだされたものである。それは絵で俳諧することであった。



蕨村筆「紫陽花にほととぎす図」自画賛  
紙本墨画淡彩 38.6×64.3 cm 愛知県美術館蔵

岩くらの狂女恋せよほととぎす 蕨村

岩倉の精神病院にいる狂女が、恋人を慕って泣き叫ぶ声と、時鳥の鳴き声を取り合わせている俳画と句。まるく太い哀歓のある書体。余白に哀しみの歌がきこえるようだ。



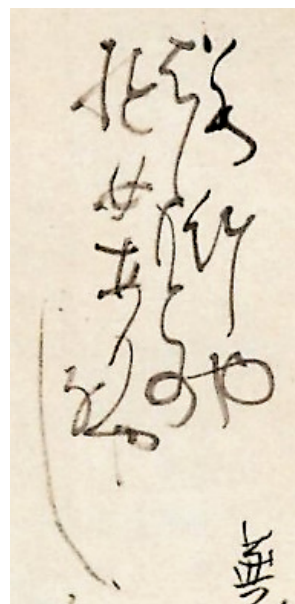
蕨村の俳画は古今独歩。それは安永に入ってから大成した。蕨村が60歳前後のころであるが、蕨村の芸術は齢を重ねるとともに豊潤になり、深められていった。俳画は筆を省略し、自然はあまり描かず人物を描き、余白の美を活用するものであるが、真に蕨村が目指したのは、詩書画一体の統合された世界であった。



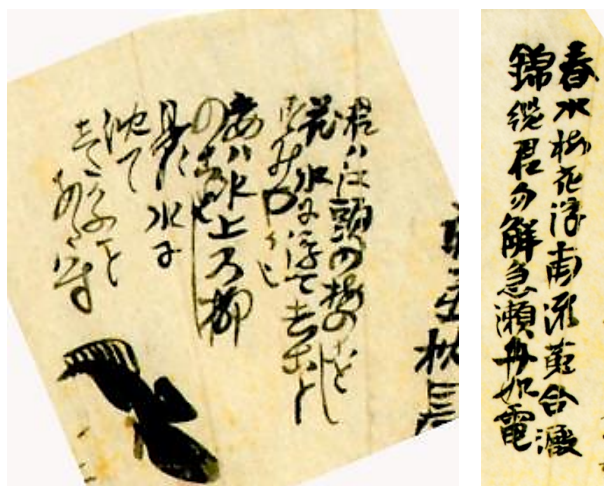
蕨村筆「若竹図」自画賛  
紙本墨画淡彩 111.2×28.8  
愛知県美術館蔵  
(落款) 蕨村  
(白文長方連印)「謝長庚」「春星氏」

(画賛) 若竹やはしもの遊女ありやなし 蕨村

橋本とは、淀川のほとりにあった橋本宿のこと。むかし遊女町としても賑わったらしい。竹林の中に見える家は、むかし遊女が住んでいた家なのだろうか。自然な渴筆が美しい。細い竹の絵に合わせたかのように、繊細な線と墨法で細やかに書かれている。最後の長く伸びた「し」が、余情をかきたてるようだ。



蕨村筆「澱河曲」紙本墨画淡彩 扇面 17.8×50.8 cm 個人蔵



(自画賛)

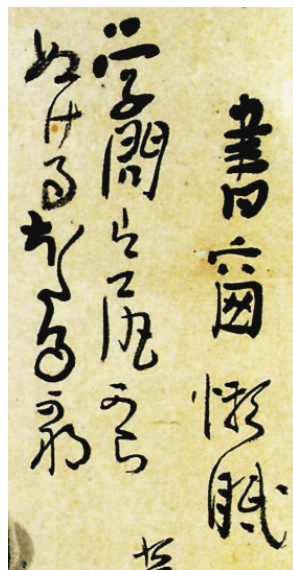
扇面の右側に漢詩二首、左に和詩一首が書かれている。漢詩の題に「伏見百花楼に遊び、浪花に帰る人を妓に代わって送る」とある。  
「春水梅花浮南流菟合澱・菟水合澱水交流如一身・・・」  
「君は江頭の梅のことし 花水に浮て去こと すみやか也 妾は水上の柳のことし 影 水に沈てしたかふことあたはす」

澱河とは淀川、菟水とは宇治川のこと。漢詩は男、和詩は女が詠んでいる。安永6年（1777）頃の作。



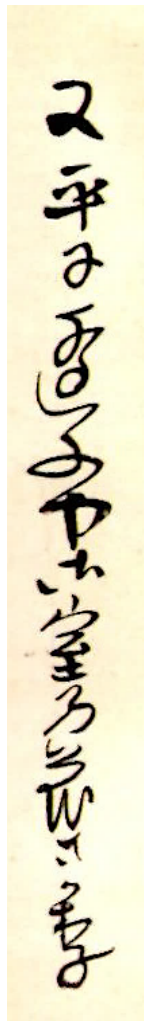


蕪村筆「学問は」自画賛 個人蔵  
紙本淡彩 28.7×21.5 cm



(画賛) 書窓懶眠  
学問は尻からぬける  
ほたるかな 蕪村  
中国の東晋代の車  
胤と孫康が貧しく  
て、夏は蛍の光で、  
冬は雪明かりで勉強  
したという話をもと  
に詠まれた句。(「蛍  
雪の功」の故事)

脱力感のある書き  
ぶりで、怠けて眠っ  
ている人物が夢を見  
ているような書体。

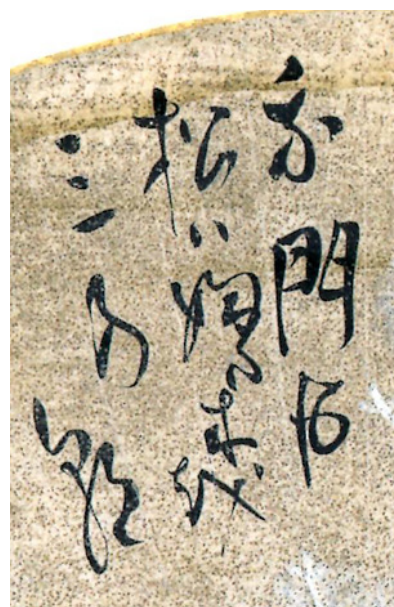


蕪村筆「又平自画賛」  
紙本着色 103.4×26.4  
逸翁美術館蔵

(画賛)  
みやこの花のちり  
かゝるは光信が胡  
粉の剥落したるさ  
まなれ  
またへい  
又平に逢ふや御室  
の花さかり 蕪村  
賛や句から、人物の  
背景や状況が分か  
る。又平は江戸初期  
の画家、岩佐又兵衛  
らしい。  
詩書画一体の世界。



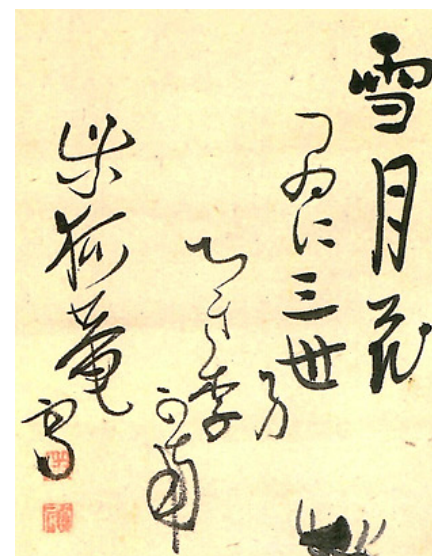
蕪村筆「我門や」自画賛 天明3年(1783) 個人蔵  
扇面 紙本淡彩 17×49.2 cm 死の年、68歳の作品。  
(落款) 癸卯正月朔応百池需 蕪邨 花押(書き判)



(画賛)  
我門や松はふた木を  
三の朝  
門人の百池のもと  
めにおうじて描かれ  
た作品。  
三の朝は、一年、  
一月、元旦の朝の意  
味。ふた木は夢の中  
で翁がもつてきた二  
本の松のこと。絵に  
は根松が描かれてい



蕪村筆「雪月花」自画賛 紙本淡彩 48.7×26.1 cm 逸翁美術館蔵  
(落款) 紫狐庵写 牛若丸と弁慶が描かれている。



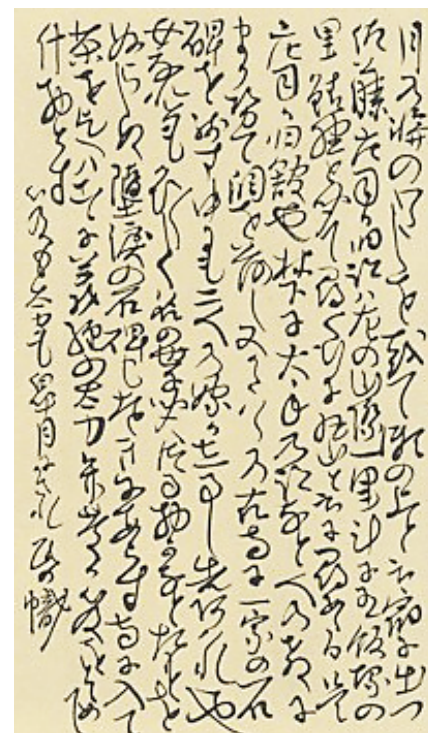
(画賛) 雪月花つゐに三世のちぎりかな 紫狐庵写



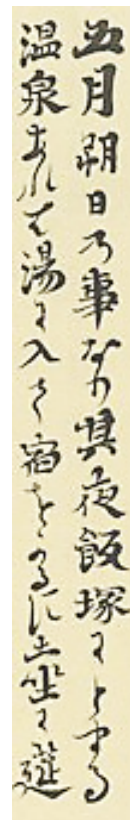
蕪村は安永6〜8年（62〜64歳）に集中的に「奥の細道図」を揮毫している。10巻以上制作したようである。その間「野ざらし紀行」も揮毫している。蕉風の流行と、蕪村の芭蕉への敬慕が、主な制作の動機である。



蕪村筆「奥の細道図画卷」部分「丸山から飯塚」安永8年（1779）上下2巻  
上巻 28×925.7 cm 下巻 28×1092.7 cm 逸翁美術館蔵  
黒柳維駒のために描いたもの。二種の書体で書かれている。



月の輪のわたりを越て、瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半斗に有。飯塚の里鯖野と聞て尋ね行に、丸山と云に尋あたる。是、庄司が旧館也。禁に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも、二人の嫁がしるし、先哀也。女なれどもかひがひしき名の世に聞えつる物かなと、袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらす。寺に入て茶を乞へば、爰に義経の太刀、弁慶が笈をとどめて什物とす。笈も太刀も五月にかざれ昏職（かみのぼり）



五月朔日の事也。其夜飯塚にとまる。温泉あれば湯に入て宿をかるに、土坐に筵（を敷て）



蕪村筆「奥の細道図画卷」部分「那須」安永7年（1778）上巻 32×955 cm 京都国立博物館蔵



蕪村筆「奥の細道図」六曲屏風一隻 安永8年（1779）139.3×350 cm 山形美術館蔵

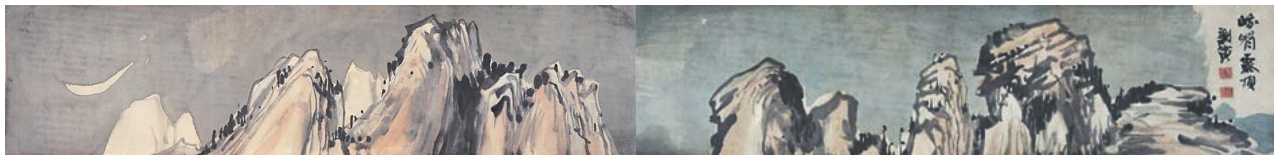
現存する「奥の細道図」の真筆は、巻物が2巻と6曲屏風が一隻である。その他、写本が一点、図版が一点ある。  
蕪村は安永5年弟子の几重（きとう）宛てた手紙に、  
「はいかい物之草画、凡海内に並ぶ者覚無之候。下直に御ひさぎ被下候。義は御容赦可被下候。他人には申さぬ事候。貴子ゆへ内意かくさず候。」と書いた。

蕪村は、俳画については古今独立の自信があり、その価値を世間に認めさせようと心を配っていたのである。  
ゆうかせ あおさき はぎ  
夕風や水青鷺の脛をうつ  
愁ひつつ岡にのぼれば花いばら  
絶頂の城たのもしき若葉かな  
遅き日のつもりて遠き昔かな





蕪村筆「富嶽列松図」65歳頃の作 紙本墨画淡彩 30×139 cm 愛知県美術館蔵 署名は蕪村



蕪村筆「峨嵋露頂図巻」65歳頃の作 紙本墨画淡彩 29×241 cm 蕪山龍泉堂蔵 署名は謝寅 李白の「峨眉山月歌」に画想を得た。



蕪村住居跡（終焉の地）

鳥丸通仏光寺西入ル。近くに伊藤若冲や円山応挙が住んでいた。天明3年（1783）9月、宇治田原へ松茸狩りに出かけ、体調を損ない病床についた。12月24日の夜、月溪に「しら梅に明る夜ばかりとなりにけり」と書きとらせ、「初春」と題を置かせ、眠るように往生したという。

俳諧師としての蕪村は、没後、世間から忘れられていった。弟子の呉春も「離俗」の教えを守らず流行作家に墮落していった。しかし、明治になって、正岡子規が、芭蕉より蕪村のほうが優れている、と讃えてから蕪村がよく知られるようになった。

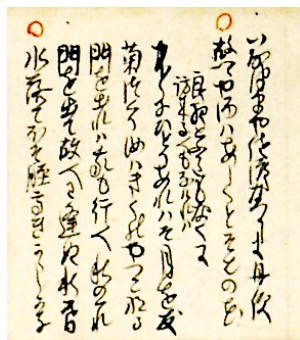
蕪村にとって芸術は、救いであり、非情な現実からの隠れ家であった。彼は、中国や日本の古今の芸術を、食欲に学んで、それらを融合し、新鮮で、瑞々しい、新しく若々しい俳諧や絵画や書を創造した。

### 稲妻や浪もてゆへる秋津島

### 涼しさや鐘を離るる鐘の声

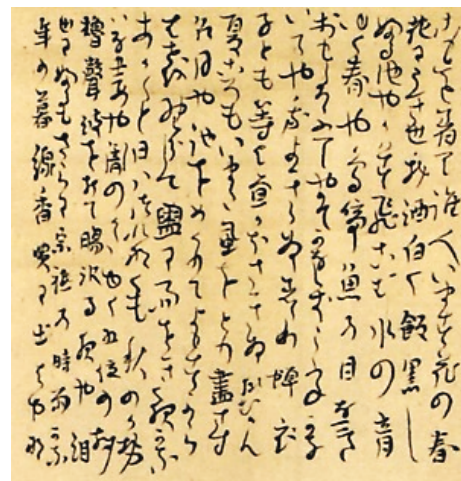


「蕪村自筆句稿貼交屏風」左隻 天明2～3年の書写 六曲一双 各151.5×310.5 画は松村呉春（月溪） 本間美術館蔵（山形県）屏風制作は蕪村没後。

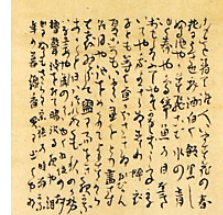
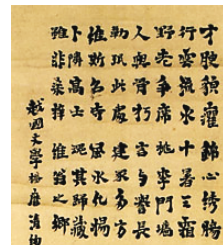


「蕪村句稿」部分

蕪村が句集を出版しようとして編集した自筆の句稿である。『蕪村句集』は蕪村の没後、弟子たちによって刊行された。正岡子規が、この句集によって、近代俳句に目覚めたと言われる。



賛に、蕪村の好きな芭蕉の句を選び、独特な書体で書いている。こもを着て誰人います花の春 花にうき世我酒白く飯黒し ふる池やはず飛びこむ水の音 ゆく春や鳥啼魚の目はなみだ おもしろふてやがてかなしきうぶねかな いでや我よききぬ着たり蟬衣 子ども等よ屋がほさきぬ瓜むかん 夏ごろもいまだ風をとり尽さず 名月や池をめぐりてよもすがら ばせを野分して盤に雨をきく夜かな あかくと日はつれなくも秋のかぜ いな妻や間のかたゆく五位の声 櫓声波を打て 陽氷る夜や泪 世にふるもさらに宗祇の時雨かな 年の暮線香貢に 出ばやな



蕪村筆「芭蕉翁像」 安永8年（1779）6歳 金福寺蔵

賛は清田儋叟の撰文と芭蕉の句。蕪村は敬慕する芭蕉を何点も描いている。



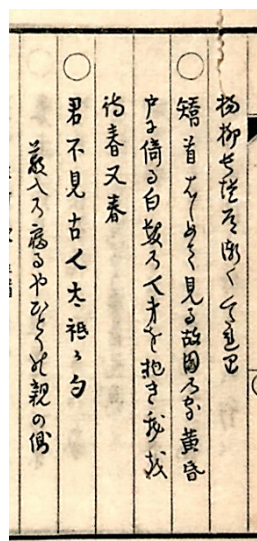


蕪村の墓

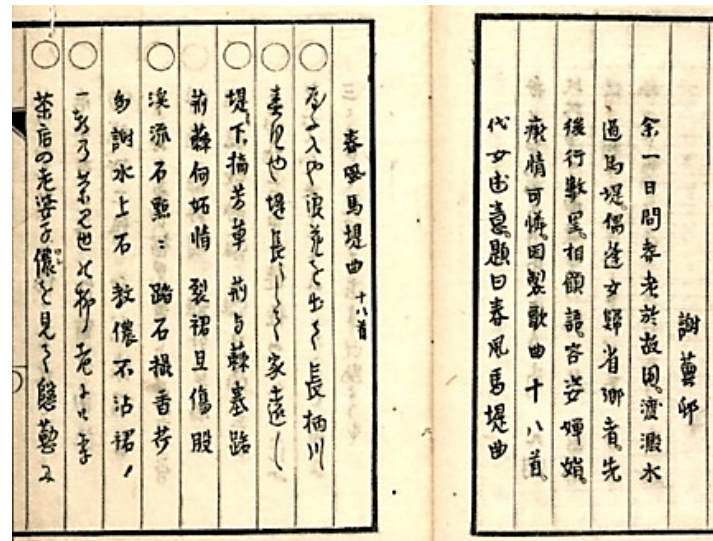
伝説では、蕪村は毛馬で生まれ、しばらくして母と一緒に母の実家の与謝村に引越した。彼が13歳の時、母が死に（入水自殺？）、彼は毛馬村に戻ったが、父も亡くなり、一家は離散。彼は旅に出た。



蕪村生誕地の句碑  
大阪市都島区毛馬町の淀川  
左岸の堤防上に建っている。  
碑には蕪村の句「春風や堤  
長うして家遠し」が真筆を拡大して彫られている。



『夜半楽』半紙本 安永6年（1777）刊 62歳「春風馬堤曲」部分 版下は蕪村自筆



関西大学図書館蔵

余、一日、耆老を故園に問ふ。澱水を渡り馬堤を過ぐ。  
偶 女の郷に歸省する者に逢ふ。先後して行くこと數里、  
相顧みて語る。容姿嬋娟として、癡情憐むべし。  
因りて歌曲十八首を製し、女に代はりて意を述ぶ。  
題して春風馬堤曲と曰ふ。

春風馬堤曲 十八首

○やぶ入や浪花を出て長柄川  
○春風や堤長うして家遠し  
○堤より下りて芳草を摘めば 荊と棘と路を塞ぐ 荊棘何ぞ  
妬情なる 裙を裂き且つ股を傷つく  
○溪流石點々 石を踏んで香芹を撮る 多謝す水上の石 儂  
をして裙を沾らさざらむるを  
○一軒の茶見世の柳老にけり  
○茶店の老婆子儂を見て慇懃に無恙を賀し且儂が春衣を美ム  
○店中二客有り 能江南の語を解す 酒錢三緡を擲ち 我を  
迎へ榻を譲つて去る  
○古驛三兩家猫兒妻を呼ぶ妻來らず  
○雛を呼ぶ雛外の鷄 雛外草地に滿つ 雛飛びて雛を越えん  
と欲す 雛高うして 墮三四  
○春艸路三叉中に捷徑あり我を迎ふ  
○たんぼ々花咲り三々五々五々は黄に 三々は白し記得す去  
年此路よりす  
○憐みとる蒲公英 短して乳を吐  
○むかしむかししきりにおもふ慈母の恩 慈母の懷抱別に春  
あり

○春あり成長して浪花にあり 梅は白し浪花橋邊財主の家  
春情まなび得たり浪花風流  
○郷を辭し弟に負く身三春 本をわすれ末を取接木の梅  
○故郷春深し行々又行々 楊柳長堤道漸くくだれり  
○嬌首はじめて見る故園の家黄昏 戸に倚る白髪の人 弟  
を抱き我を待春又春  
○君不見古人太祇が句 藪入の寝るやひとりの親の側

「春風馬堤曲」は前書きと18首の詩からなる歌曲（楽府調）。  
発句体、漢詩の絶句体、漢文訓読体、和詩体などがまざった  
独創的な歌曲である。蕪村畢生の作だともいわれている。  
むすめさんが藪入りで、奉公先から親許に帰省するまでの道  
行を歌っている。蕪村の母がモデルと思われる。近代の新体詩  
の先駆か。（安永6年2月23日付、柳女と賀瑞に宛てた手紙に、作  
曲の動機や意図や作者の真情が詳しく述べられている。）

蕪村の句「我も死して碑に迎せむ枯尾花」にしたがって、金福寺（一乗  
寺下り松の近く）の境内にある芭蕉碑のかたわらに葬られた。  
墓標の字は、雨森章迪の筆。